

児童文庫レーベルの調査に基づく児童文学の考察 —メディアの多様化との関係を中心に—

市村 彩也香

日本の児童文学は巖谷小波の『こがね丸』を起源とするのが通説であり、近代児童文学の時代を経て1958年に現代児童文学が成立した。現代児童文学は「童話伝統批判」の考え方から、石井桃子らを中心として確立した児童文学のあり方であったが、成立以降様々な変化を遂げている。1950年に創刊された「岩波少年文庫」をはじめとする「児童文庫」は、現代児童文学成立当初から現在まで様々な出版社から創刊されており、現代児童文学の変遷と現状を反映していると考えられる。現代児童文学の変遷と現状について扱った研究は、通史的にまとめたものや現代児童文学に起きた変化に焦点を当てたもののほか、児童文学の研究者、作家等による座談会があるのみで、実証的な研究が十分に行われてきたとは言い難い。また、戦後における現代児童文学の変遷と現状についての先行研究において、「児童文庫」というメディアに焦点を当てて研究したものはない。そこで本研究では、児童文庫11レーベルを対象として、児童文庫に収録されている作品の傾向の分析と児童文庫を読者に届けるための出版社の取り組みについて調査を行い、現代児童文学の現状を実証的に明らかにすることを目的とした。

本稿の内容は、おもに(1)児童文庫レーベルに収録された作品の分析、(2)児童文庫における出版社の取り組みの分析からなる。2009年以降に創刊された児童文庫である「角川つばさ文庫」、「集英社みらい文庫」、「小学館ジュニア文庫」が近年作品数を伸ばしており、児童文庫出版の性格を特色づけていることが明らかになった。児童文庫が原作とする作品は小説、テレビドラマ、映画、アニメ、ゲームなど、子どもの身近にある娯楽を基にしたエンタテインメント性の強い作品が増加している傾向が見られた。この傾向はライトノベル作家やマンガ家など児童文学作家以外の作品が収録されていることにも表れており、メディアミックスを中心とした多様化が進行していることが指摘できた。また、児童文庫のウェブサイトのコンテンツを対象とした調査と分析では、言葉遣いや平仮名・漢字の使用、色使いなどに配慮されている点や、動画の配信やファンクラブの結成など子どもの興味を引くための試みを行っている点から、出版社が「子ども」の存在を強く意識して情報の発信をしていることが明らかになった。児童文庫の編集や文学賞の選考など読者参加型の取り組みも行われており、出版社の取り組みの点からも従来の現代児童文学から大きく変化していることが明らかになった。

従来の研究では、現代児童文学が多様化しつつあり、ボーダーレス化が進行していることや読者の年齢層の上昇が指摘されてきたが、本研究ではその多様化の特徴や具体的な内容を実証的に明らかにできた。

(指導教員 原 淳之)